鎌倉の石碑をめぐる

2018年10月30日

鎌倉淡青会公開セミナー

郷土史家

猪　熊　紀　彦

目次

1. 石渡新造サ衛門之碑 (本覚寺境内鐘楼前)
2. 建長寺佛殿唐門重修の記 (建長寺佛殿前)
3. 今宮 (青年團の碑) (今宮境内)
4. 鎌倉山記 (鎌倉山)
5. 十一人塚(青年團の碑) (稲村ガ崎)
6. 新田公遺蹟陣鐘山之碑 (稲村ガ崎)
7. 鎌倉宮碑 (鎌倉宮境内)
8. 鎌倉に紅葉を植る記 (鎌倉宮境内)
9. 立正安国論御勘由来聖筆副碑 (光則寺境内)
10. 四条金吾邸址 (収玄寺境内)
11. 玉縄首塚由来 (大船駅傍)
12. 松陰先生留跡碑 (瑞泉寺山門前)
13. 天神山碑 (山崎天神境内)
14. 天保九如 (長谷大谷尸)
15. 浅間神碑奉遷紀念辞 (長谷大谷戸)
16. 高井真哉君碑 (安養院墓地入口)
17. 間島君旌徳碑 (御成小学校)
18. 諏訪神社板額 (諏訪神社社殿前)

鎌倉の石碑マップ

1：21,000 相当

地図上の1センチは 約 210 メートル

鎌倉の石碑の特徴

- 鎌倉市内に点在する石碑の数は凡そ百数十基を数えるものと思われます。そのうち半数ぐらい（７８基）は「青年団のいしぶみ」と呼ばれるもので、戦前「在郷軍人会」「消防団」と並び称された「青年団（初期には青年会）が建立したものです。
- 青年団の石碑は「鎌倉史跡道標」という性格を持ち、それ以外の石碑は何らかの事件や行事にあわせて個々に建立されました。
- 今回の石碑紹介はある程度歴史に沿った形でと考えて碑文を選んであります。所在地地図と合わせご覧いただければ幸甚です。

1. 石渡新造サ衛門之碑

石渡新造サ衛門之碑（裏面）

妙巌山本覚寺者、永享八年間、一乗（院）（日）出師の創建する所也、新造左衛門は姓を石渡と曰い、三浦郡宮田邑に世住し、夙に四天王に禱り雄力を獲。常に百貫の鉄棒を杖とし、開祖（日）出師折伏弘経の時に当り、常に警衛に侍し、（伊）豆、相（模）の間を周旋す。後年（日）出師、房総諸国を遊化し、遂に木更津八幡社に到りて、適別当泉蔵寺と法戦を開き対論数番、終に敗屈（せしむ）。神官八剣（日）出師の学徳に深く感じ、社什の梵鐘を出して永く論敗の証と為す。新造甚だ喜び之を杖頭に掲げ而帰る。即ち自山の蔵寶庫の梵鐘是也。寛政四年五月九日を以て歿す。年七十五。正徳年間猪熊と改姓し、家系綿々以て今代啓助に至る。語りて曰く積善の有慶は猪熊に於けり。明治戊戌三月之を立つ、　当山嗣法　日調識

（読責／猪熊）

（裏面）

2. 建長寺佛殿唐門重修の記

重修碑

建長寺仏殿唐門重修の記

伝へ云ふ当仏殿は唐門と共にもと徳川家光の弟忠長が生母崇源院夫人の為に霊屋として建造せし所後家光之を本寺に寄附し駿府より移して規模を改めたるものなりと其結構の壮麗技巧の優秀能く江戸時代初期の手法を存す是を以て大正十一年古社寺保存法によりて特別保護建造物に指定せらる然るに同十二年九月一日関東に大震あり鎌倉地方其の害殊に甚だしく二宇亦倒壊全く原形を留めざるに至れり乃ち本寺は災後直に文部省に議り廃余の残材一切を拾収して其の散佚を防ぎ以て予め他日の用に備ふ而して幸に国庫の補助を得重修の工事は総べて之を神奈川県庁に委嘱す斯くて大正十三年十月起工同十五年五月を以て仏殿唐門共に其の工を竣へたり抑々本工事の旨とする所は専ら旧態を存し寸毫も増損せざらんとするにあり故に古材の苟くも用ふべきは必ず之を用ひ用に堪へざるものは已むを得ず代ふるに新材を以てすれども文彩によりて古色を帯ばしめ以て務めて旧観の美を損せざらしめたり

篆額並書　菅原時保

（写責・読責／猪熊）

3. 今宮（青年團の碑）

（写責・読責／猪 熊）

鎌倉史跡案内石碑（今宮）

今　宮

四条天皇延應元年鎌倉中處々喧嘩鬪諍ノ事
アリ特ニ其ノ五月廿二日ニハ大騒動ヲ起セ
シト云フ茲日後鳥羽院ハ隠岐ニ崩御シ給フ
由リテ斯ハ其ノ怨念ノ然ラシメシ所ナラン
トテ寶治元年四月大臣山ノ西麓ニ今宮ヲ建
テ其院ノ尊霊ヲ勧請シ奉リ順徳院及ビ護持
僧長賢ヲ合祀セラル長賢ハ承久ノ後官軍ニ
属シテ奮戦後捕ハレテ陸奥ニ謫セラレシ者
ト云フ今宮ハ又新宮ト書ス

昭和四年十二月　　鎌倉町青年團

4.鎌倉山記

鎌倉山記

ローストビーフの店 鎌倉山 本店
夫婦池公園
鎌倉山動物病院
ハウス オブ フレーバーズ
鎌倉山碑
鎌倉警察署 鎌倉山駐在所
日本
Google

鎌倉山記

天慶ノ乱ニ平貞盛ガ将門ヲ夷滅シテヨリ平氏ノ威勢漸ヤク東国ニ張リ其孫直方鎌倉郡ニ在リテ幾多ノ荘園ヲ領有ス、後冷泉天皇ノ世、源頼義相模守ニ任ゼラレテ鎌倉郡ニ入ルヤ直方ノ婿トナリ源氏ノ根拠ヲ東国ニ植ユ、当時京都奈良ニ於ケル山門ノ豪僧ガ朝廷ニ迫ルヤ頼義、直方等源平二氏相連引シテ朝廷ヲ守護ス、後頼義、義家ノ前九年、後三年ノ役ニ従事シタル将士ハ実ニ此地方ノ荘園ヨリ台頭シタルモノナリ、当時鎌倉郡ヲ周匝シタル群峰ヲ概称シテ鎌倉山ト言フ、是等ノ丘岳ハ文献ニ記録セラレタル以外ニ豪族闘争ノ古戦場ナリシコトハ親不知ノ嶮、戦道ガ峯等ノ地名ガ今猶ホ存スルヲ見テ之ヲ知ルヲ得ベシ、治承四年源頼朝ガ兵ヲ相模ニ起シ一勝一敗ノ後、漸ヤク房総ノ地ニ勢ヲ張ルヤ安達平九郎盛長ノ説ニ従ツテ府ヲ鎌倉ニ開キ、之ヨリ荊棘ノ地変ジテ大都トナル、昭和三年七月廿七日菅原通済君同志ト協力シテ鎌倉山ヲ開キ道路ヲ通ジテ住宅地トナス、鎌倉ガ義貞ノ為ニ壊滅シタル後六百年ニシテ嶮峯ノ上ニ彩瓦ノ新屋起リ戦道変ジテ自動車道トナリ朽剣ヲ裏ム苔土ニ吉土ノ笑語ヲ聞キ釵玉ノ埋レタル短草ニ妙婦ノ衣裙翻ヘリ昇平ノ気蒸々トシテ山谷ノ間ヨリ湧ク、昭和十年七月余此地ニ遊ビ菅原君ト共ニ風物ノ変化ヲ語リ歩シテ鎌倉山神社ノ石磴ニ昇レバ富士山、箱根連峰、天城山等ノ遠岫交モ濃淡ノ色ヲ示シ斜陽影裡ニ来往スル船影ノ彼方ニ大島ヲ見天地双碧人ト家ト皆ナ画中ノモノタルヲ覚ユ、嗚呼、曾テ鎌倉ノ大都ガ鬱然トシテ荊棘ノ中ヨリ湧キ出デシコトヲ回想スレバ百年ノ後鎌倉山ノ形勢ソレ如何ゾヤ之ヲ思フテ感慨限リナシ乃チ茲ニ此事ヲ録シテ以テ後世ノ語リ草トナス

昭和十年七月

竹越與三郎　撰

菅原通済　題

東京青山　石勝　刻

裏・・・(音)カ　(訓)つつむ

(写責・読責／猪熊)

5.十一人塚(青年團の碑)

鎌倉史跡案内石碑

十一人塚碑　　田邊松坡撰幷書

元弘三年五月十九日新田勢大館又次郎宗氏ヲ
将トシテ極楽寺口ヨリ鎌倉ニ攻入ラントセシ
ニ敵中本間山城左衛門手兵ヲ率キテ大館ノ本
陣ニ斫込ミ為メニ宗氏主従十一人戦死セリ即
遺骸ヲ茲ニ瘞メ十一面観音ノ像ヲ建テ以テ其
ノ英魂ヲ弔シ之ヲ十一人塚ト稱セシト云フ

昭和六年三月　　鎌倉町青年團

（写責・読責／猪熊）

6. 新田公遺蹟陣鐘山之碑

新田公遺蹟陣鐘山之碑　勇作題

参謀総長元帥陸軍大将子爵　上原勇作篆額

此を陣鐘山の遺蹟となす元弘三年五月新田義貞公関東の兵十二万を
率ゐて北條高時を攻め二十一日夜半極楽寺に向ひ進んで姥ケ懐に
陣し払暁鐘を此山巓に懸けて敵勢を牽制し更に稲村ヶ崎より廻りて
鎌倉に乱入し終に之を滅ぼす里俗伝へて陣鐘山といふ今を距ること
五百九十年前なり又大正二年支那南方の将軍李烈鈞氏亡命して
難を我国に避け偶山下の一荘に仮寓し回天の密議を凝らせり
芹澤登一君別墅を茲に営み義貞公の遺蹟の湮滅せんことを
虞れ李氏の游蹤の存するを喜び其荘を名けて陣鐘山義烈荘と
いひ石を建てゝ之を不朽にせんとし余に嘱するに文を以てす夫れ
鎌倉は史蹟の地元弘の役は建武中興の基を開きし所南北両朝は
此によりて統一せられたり陣鐘山は実に其死命を制せし所なり而して
支那南方の李氏が来りて以て劃策せしも亦支那南北統一にありしこと
疑ふ可らず此地にして此事あるは奇と謂ふべきなり乃ち為めにその
梗概を叙すといふ

大正十二年一月

文学博士　遠藤隆吉撰并書

（写責／読責　猪熊）

7. 鎌倉宮碑

土牢
鎌倉宮碑
鎌倉宮碑
鎌倉宮
拝観受付所
盃割り舎
宝物殿
社務所
太平殿(参拝者休憩所)
鎌倉宮のトイレ
Google

鎌倉宮碑

明治六年四月十八日車駕　鎌倉ニ幸シ　親シク故征夷大将軍二品護良親王ヲ祭ラセ給フ　越エテ十七日　闕　ニ還ラセ給ヒ　太政大臣三条実美ニ勅シテ曰ク　親王ハ皇室式微武臣専横ノ日ニ在リ　艱楚嶇嶔遂ニ能ク鴻業ヲ恢復ス　而シテ目錦萋斐冤ヲ呑ミテ薨シ給フ　朕之ヲ憶フ毎ニ未タ嘗テ歔欷シテ泣下ラズンバアラザルナリ　今親シク遺跡ヲ弔ヒ　感慨殊ニ深シ　顧ミルニ　朕否德　幸ニ泰運ニ膺リ　大権ヲ既墜ニ復ス　祖宗ノ遺德ト股肱ノ力ヲ致シタルトニ由ルトイフト雖モ　亦親王ノ霊　冥冥ノ中ニ翼賛シタル者ナシト謂フベカラズ卿其レ表彰スル所以ヲ図レト　実美拝シ稽首シテ曰ク　敬ミテ明詔ヲ承ハル　抑親王ノ忠憤義烈身ヲ以テ国ニ殉ズ　事ハ史冊ニ具ニシテ必ズシモ称揚ヲ待タズ　惟フニ陛下ノ聖明　今日ニシテ斯ノ挙アリ　洵ニ是レ曠古ノ盛典ニシテ　独リ親王ノ地下ニ瞑目セサセ給ハムノミナラズ　陛下ノ聖德モ亦将ニ久遠ニ伝ハリテ泯ビザラムトスル也　請フ諸レヲ石ニ勒セムト　上　曰ハク可ナリト　是ニ於テ小内史巌谷修　命ヲ奉シテ其由ヲ記シ　係グルニ銘ヲ以テス　銘ニ曰ク

土窟幽暗　久シク蒿蓬ニ没ス
昌運維レ新ニ　煥タル其宮アリ
明主ノ德　親王ノ忠
千秋赫奕　孰レカ欽崇セザラム

明治六年五月　少内史正六位巌谷　修撰
大正十年六月　正二位大勲位侯爵松方正義書

（写責・読責／猪熊）

車駕＝天皇の乗る車（転じて天皇のこと）
幸す＝行幸
闕＝宮城
式微＝衰退する
艱楚嶇嶔＝険しく苦しい道
鴻業＝大きな事業
目錦萋斐＝巧みに罪を作り上げる告げ口
冤＝うらみ
薨ず＝皇族または三位以上の人の死去
歔欷＝すすり泣く
泰運＝太平の機運
既墜＝本来の場所
冥冥＝奥深く見えないさま
翼賛＝天子を補佐すること
所以＝理由
曠古＝昔から例がない（未曾有）
勒す＝刻む

8. 鎌倉に紅葉を植る記

（鎌倉宮境内）

鎌倉に紅葉を植る記

景山鹿島万兵衛翁は、明治初年以来吾国紡績魚牧開墾等の殊勲者なり。性惇雅よく人を愛す。業成て老を鎌倉に養ふ。今茲七十七歳を慶す。故旧、為に之を賀せんと請ふ。翁曰く、鎌倉の景勝独り秋色に乏し。我深く之を惜む。願くは、わが為に此地の諸名境に紅葉を植よ。後世是に由て永く秋色を賞し得ば、是れ我が無限の寿なりと。衆、感激して其言に従ひ、乃ち紅葉の良種千株を鎌倉宮及鶴ヶ岡等の数所に分植して長へに千歳の錦を織らんとす。庶寿会同人来て予に其事を記せんことを乞ふ。予翁と面識なしといへども其風流に共鳴して為に一言を録す。

大正十四年十一月吉蓂

巴雷居士田中智学撰并書

故旧＝古い知り合い

吉蓂＝「キツメイ」とも読む。蓂は「こよみぐさ」。

（写責・読責／猪熊）

9. 立正安国論御勘由来聖筆副碑

（立正安国論御勘由来聖筆副碑）

立正安国論御勘由来の聖筆碑を光則寺の浄域に建つる記

我国正嘉正元の頃空前乃国災連りに臻り上下惶惑志て為す所を知らず日蓮大士深く之を慨し経證に照して災禍の因や世皆正に背き人悉く悪に帰するに基くを知り尚深く聖識を究て内乱外寇の必ず当に来るべきを告げ以て忠諫の誠を致す其書を立正安国論と名け之を権宰北條時頼に薦めんとし先ず儒官比企能本に視し口吏宿谷光則を経て上書す時に文応元年七月十六日なり是を法国相接の始と為す光則寺実に其跡也今茲有志胥計り御勘由来の聖筆を貞珉に墓刻して聖事蹟を万代に光顯せんとす誠に国家最尊の史蹟と謂ふ可し

昭和十一年七月宣正節

本化末葉　師子王道人　田中智学虔撰

門人　師子王文庫学頭　文学博士山川智応謹書

東京　野村保泉謹刻

（写責・読責／猪熊）

10. 四条金吾邸址

四条金吾邸址

伯爵東郷平八郎書

（裏面）

法華宗乃四条金吾　諱は頼基北條氏の族江間親時の宰臣
なり性剛直曽て豆州江間に在て主家の変を聞き馬を飛し
三時に函嶺の嶮を踏破して殉死乃列に入る忠烈斯の如志
深く日蓮聖人に帰し龍口法難には倶に死せんとし佐渡に身延
に供給誠を竭して身を終ふ世に日本武士の典型妙宗信者の
良範と仰く　遺烈万代光輝大千あゝ此偉人

大正十二年二月　為四条邸址復興発起者之嘱

智学居士　田中巳之助撰并書

（写責・読責／猪熊）

11. 玉縄首塚由来

怨親平等

玉縄首塚由来

今を距る四百四十余歳　大永六年(一五二六)十一月十二日南総の武将里見義弘鎌倉を攻略せんと欲し鶴岡八幡宮に火を放ち　府内に乱入せるを知るや時の玉縄城主北條氏時(早雲の孫)　豪士大船ノ甘粕　渡内ノ福原両氏と倶に里見の軍勢を比処戸部川畔に邀撃し合戦数合之を潰走せしめ鎌府を兵燹より護る　この合戦に於て甘粕氏以下三十有五人は戦禍の華と散り　福原氏は傷を負ひ里見勢の死者その数を知らず　干戈収て後城主氏時彼我の首級を交易し之を葬り塚を築き塔を建て以て郷関死守の霊を慰め怨親平等の資養と為し玉縄首塚と呼称す　経云我観一切普皆平等

昭和四十二年八月　　玉縄史蹟顕彰会建之

篆額　富岡周吉郎

文並書　光峰　楚石

(写責・読責／猪熊)

12. 松陰先生留跡碑

（裏面）

（瑞泉寺）

松陰吉田先生留跡碑

瑞泉寺竹院上人松蔭吉田先生伯父也
先生訪上人於瑞泉寺前後四回
其在埜山獄也賦詩曰

山光竹色入窓青
方丈幽深倚錦屏
今我為囚空憶昔
月中一夜叩雲扃

可以知先生魂魄存于此地也

昭和四稔四月　　蘇峰菅原正敬撰并書

13. 天神山碑

天神山の碑

大船車站の西南十町許り、老松蔚茂し崢嶸と而聳ゆる者天神山と曰う。此は山崎の村社たる菅公の神祠の在す所なり。山は旧除地に係り而、村人の管理する所也。

明治の初め、御料林に編入と為り、民の不安者久し。三十三年十一月、会宮内省は告示第拾壱号を以って社寺上地御料林野特売の規程を頒布す。民の喜び甚だし。

適氏子総代梅沢松太郎氏は村長の職に在り、因て大いに斡旋して講の醵金法を首む。乃貧富の分・等級に随いて各戸に米麦若干を出ださ使め、諸を金に兌え、以て利殖を図る。凡そ四寒暑を閲して全きを告ぐ。

是において竟に官許を得て之を購う。時に四十年七月也。其の間、時に飢歉有りと雖、各競いて之を納め、敢て或いは滞ることなし。克く巨費を償うを卒えて、復以て社有となすを得たる者、蓋し至誠敬神の然ら使る所也。其の事尤も美しく、豈湮滅す可哉。

頃者当事者某は仏日庵東洋師を介して、余に之を紀すを請う。因て粗に其の事を叙ること此の如し。

明治四十四年四月

前円覚寺管長　宮路宗海　撰

参学　中村物外　書

宮　亀年　刻

（写責・読責／猪熊）

14. 天保九如

天保九如

大正四年十一月十日御即位の大典を挙げさせらるゝが記念として鎌倉町長谷乃有志百二十一名相謀り字大谷に於ける其の共有地二万余坪に松桜能若木数万本を植ゑ遊園を開き以て衆庶能逍遥散策に供せり今より後数年を出でず志て満渓の桜花翠松に隠映し烟霞錦の如き美観を呈せんこと期して待つべきなり由来鎌倉の地たる名勝故蹟に富むと雖も公園の設少く人口年を逐ふて増し遊客亦日に多きを加ふるに方り一の闕点たる免れざりし際茲に此の事ありたるは吾人の感喜措かざる所にして将来町の発展に資すること甚大なる者あらむ有志者報国の誠意大に称すべく而して当町が此の絶好の娯楽地を得たるは洵に昭代の賜なり頃日園中に形勝の地を相し石を建て題字を松方侯爵に乞ふ侯天保九如の四大字を書し与へらる余亦嘱に応じ数言を叙し以て此の美挙を後昆に伝ふと云爾

伯爵　陸奥広吉　誌

（写責・読責／猪熊）

15. 浅間神碑奉遷紀念辞

浅間神碑奉遷紀念辞

浅間神碑ハ天保年間ノ創立ニシテ嘗テ大仏坂上ニアリ附近ノ祭神タリシカ近時ニ至リ草木繁茂詣道(けいどう)為ニ没スルヲ憂ヒ長谷青年会ノ諸氏相謀(はか)リ多数ノ賛助ヲ得テ新ニ大谷七口ノ地ヲ卜(ぼく)シ共有地一部ヲ開拓シテ遊園地トナシ森林雑草ヲ刈除(がいじょ)シ植(うう)ルニ緑樹花木ヲ以テシ道路ヲ設ケ神碑ヲ奉遷シ大正四年参月七日起工同年四月参日竣成同年五月壱日奉遷紀念ノ祭典ヲ挙行セントス諸氏ノ労以テ多トスヘク神霊亦長ヘニ守護アランコト期シテ待ツヘキ也茲ニ因由(いんゆう)ヲ略叙シ以テ後世ニ伝フト爾(ママ)云(ママ)

大正四年乙卯年四月中旬　　藤原親忠　撰書

（写責・読責／猪熊）

16. 高井真哉君碑

高井真哉君碑

維時大正十二年九月一日稀有ノ大地震我ガ関東地方ヲ襲フヤ当地亦其ノ惨禍ヲ蒙ムルコト甚ダシ高井真哉君ハ時恰モ本町青年団小町支部長ノ職ニ在リシガ偶々家屋ノ倒潰ニ遇ヒ加フルニ猛火ニ包マレ一家ヲ挙ゲテ震災ノ犠牲トナル嗚呼何等ノ悲惨事ゾヤ

顧ニ君人トナリ謹厳ニシテ労役ヲ厭ハズヨク我ガ青年ノ指導ニ盡粋シ衆人畏敬ノ的トナル宜ベナル哉其ノ実績ノ益々光輝ヲ放ツコトヤ　吾人ハ今ヤ君ガ災害ノ跡ヲ見転タ哀惜ノ情ニ堪ヘズ茲ニ碑ヲ建テ以テ永ク記念トスルモノナリ

大正十四年九月二十四日　　鎌倉町青年団小町支部

（写責・読責／猪熊）

17. 間島君旌徳碑

上の写真は下記ブログより。
https://tuesgenial.exblog.jp/17354541/
紀ノ国屋 鎌倉店
市役所前
鎌倉市役所
みずほ銀行 鎌倉支店
鎌倉
アルス鎌倉御成町
鎌倉市立御成小学校
間島君旌徳碑
Google

間島君旌徳碑

正四位勲二等　荒川巳次　題

史蹟に富める鎌倉の地たる風光明媚にして氣候沖和加ふるに交通至便の為め四方より来り其の形勝を相して邸宅荘園を造營せる人少からず而して巨萬の財を此處に提供し公共文化の施設に資せられたる間島弟彦君の如きは希覯と為す昭和三年七月君の遺言に因り愛子夫人の名を以て鎌倉國寳館基本金鎌倉町第一第二小學校鎌倉高等女學校等維持費鎌倉同人會及國寳館建設費と尋て九年五月由比濱土地家屋賣却代金の内若干を鎌倉町立圖書館建設費とに寄附せられたり君は舊名古屋藩士間島冬道翁の七男なり明治三十一年三井銀行に入り横濱大阪等の支店長を経て大正七年取締役に昇り十二年病みて職を辞し鎌倉に静居し昭和三年三月葛西谷の宅に逝く年五十八君資性明敏にして剛直尤も氣節を重んし屡人の急に趨く又文芸を好む先人冬道翁は明治の初十五銀行創立者たり兼て和歌に長ず君洵に善く箕裘を継ぐ頃者圖書館建築の功竣らんとす鎌倉町は町會の決議に随ひ碑を館側に建て君の徳を紀して石に勒し之を不朽にせんとし文を余に囑せらる其の梗概を叙述し且君の國風一篇を録して銘に代ふある時と題して

ふむは大地いたたくは天ますらをの手して拓きて高歩むへし

昭和十一年三月　松波　田邊新撰 并 書

白瀧幾之助畫　石井玉泉　刻

（写責・読責／猪　熊）

18. 諏訪神社板額

諏訪神社
諏訪神社板額
諏訪神社前
龍寶寺
3丁目
玉縄城 長屋門
玉泉寺
402
鎌倉市立玉縄小
クリエイトS・D
鎌倉玉縄店
1丁目
鎌倉市玉縄図書館
玉縄中学校
入口
鎌倉市立玉縄中
日比谷花壇大船
フラワーセンター
Google
山崎跨線橋北

（諏訪神社境内）

明治卅七年二月日露國交ノ断絶ヲ告グルヤ帝國軍艦ハ舳艫相啣ミテ佐世保軍港ヲ解纜シ直ニ仁川并ニ旅順口外ニ進撃シ大ニ機先ヲ制シテ露國艦隊ノ主力ヲ減殺シ尋デ陸軍ノ貔貅ハ迅雷的動作ヲ以テ満韓ノ野ニ完塞シ先ツ鴨緑江ニ九連城ニ蛤蟆塘ニ金州城ニ敵ノ心胆ヲ震慄セシメ進ンデ南山ノ険ヲ抜キ難攻不落ト称セシ旅順ヲ陥落シ更ニ普蘭店得利寺蓋平等ニ頑強ナル敵ヲ破リ益々北進シテ遼陽ヲ占領シ黒溝台沙河ノ大會戰及ヒ奉天附近ノ激戰ニ於テ大ニ敵軍ヲ撃砕シ遂ニ敵ヲ渾河以北ニ壓迫シテ再ビ振フ能ハザルニ至ラシメタリ

舳艫＝舳（へさき）と艫（とも）が触れあわんばかりに次から次へと進む様子

解纜＝船のともづなを解いて出港すること

貔貅＝空想上の猛獣、貔は雄、貅は雌、転じて勇猛な兵士のこと

三十八年五月敵艦波羅的(バルチック)艦隊
約四十隻(せき)對馬沖ニ出現セリ茲(ここ)
ニ於テ吾ガ精鋭ナル聯合艦隊
ハ猛然トシテ之ニ對抗シ敵艦
ヲ日本海上ニ包圍シ盛ニ枹火
ヲ集中セリ　ヲ以テ敵艦ハ或
ハ撃沈セラレ或ハ捕獲セラレ
名誉アル戰捷ノ桂冠ハ吾ガ艦
隊ノ檣頭ニ翻レリ茲ニ於テ露
國ガ数次戰敗四棋ノ　望全ク
絶ヘ帝國最終ノ勝利ヲ博スル
に至レリ
此ノ戦役タル実ニ前代未聞ノ
大戰ニシテ交戰一年八箇月ニ
亘リ三十八年十月ヲ以テ講和
成立セリ今ヤ平和克復シ振古
ノ大戰捷ハ吾ガ国民ノ忠烈勇
武ノ坤輿萬邦ニ発揮シタリ即
チ茲ニ其ノ概要ヲ録シテ以テ
不朽ニ傳フル所以(ゆえん)也
維時(ときこれ)明治三十九年九月吉日
（写責・読責／猪　熊）

枹火＝砲火
「以下読みとれない字多し」
戰捷＝勝ち戰
振古＝大昔
坤輿＝地球、大地
萬邦＝世界中の国

おわり
ご清聴ありがとうございました。